

新設私立小学校における英語教育改善の取り組み

立命館大学 湯川 笑子

1. はじめに

本稿は、本年度（2022年度）4月に4年生までの4学年を受け入れて開校した私立のある小学校（以後 K 校と呼ぶ）の英語教育改善プロジェクトの報告である。匿名性を確保するために学校やカリキュラムの特徴についての詳細は控えるが、K校は児童の英語力を非常に高いものに育てることを一つの特色として打ち出しており、1-2年生は週4時間、3年生以上は週3時間の英語授業を実施している。英検は小学生を対象にしたものではないのでおおよそその目安にすぎないが、卒業時には準2級相当の力を身につけさせることを担当者内での目標としている。筆者は開校と同時にその英語教育の支援に入り、訪問指導、遠隔でのメールやZoomを通しての指導を継続している。

2. 新設私立小学校の英語教育改善支援の難しさ

私立小学校の英語教育改善支援には中学校や高等学校の授業改革とは異なる難しさがある。その難しさの1つの原因は、私立の授業時間用に国で定められたカリキュラムと教科書がないことにある。2020年度から全面実施されている現行の小学校学習指導要領では3,4年が週1時間、5,6年が週2時間（基本的には）英語を学ぶとされているが、多くの私立小学校では学校の特色を打ち出すために英語授業時間を増やしている。そのためカリキュラムは質・量ともに多くのものを扱うことになるためそれにぴったりした検定教科書がない。検定教科書以外を見ても日本で使われることを意図した私学用の英語教科書は少なく、他方で写真やテーマが豊富な海外の出版社の教科書はレベルが高すぎたり、内容に盛り込まれた場面や状況などが日本人児童向きではなかったりする。したがって私立小学校ではそれぞれ独自に自校のカリキュラムと教材を作成する必要がある、小学校での教育改善支援は指導内容全体の吟味と再構築から始め、そこから教材の開発、指導方法の改善へとつなげなければならない。つまり、教育改善は指導方法の改善以外の要素を多く含むのである。

私立小学校英語教育改善が一般的にどこでも難しいことに加えて、本報告の対象校の場合には新設校ゆえの難しさもある。たとえ、1年生から6年生までに学習させたい口頭と読み書きの知識や技能の項目、英語で成し遂げるタスクをおおよそ選出しておいたとしても、新設校の初年度には1年生以外の学年でそのような積み上げ式のカリキュラムを使用することはできない。K校は初年度に1年生から4年生までを受け入れたが、たとえばその4年生は、その学校で1年から3年生までを過ごして4年生となった児童とは英語学習の履歴が異なる。しかしそうは言っても、学年が上がるほど認知能力、集中力、学びのストラテジーなども高くなることから、3年生や4年生が1年生や2年生のカリキュラム内容を同じペースで学ぶ必要はなく、個人差や家庭での英語経験といった変数もあることから、最終的には間断なく児童の学習進捗状況や取り組む時の姿勢を見定めながらカリキュラムを調整していくこととなる。

この学校の状況を考えると、高学年では社会、理科、総合などの要素を取り入れていくとよいと筆者は考えているが、これについても初年度の半年が経過したにすぎない今の段階では児童の準備状況の予測がつかずカリキュラム化の判断が難しい。(外国語授業に他教科の要素を入れることについては、湯川・バトラー2021を参照されたい。)

新設私立小学校の英語教育の難しさのもう一つの要因は、K校では英語授業を日本人英語教員と英語を第1言語とする海外出身の教員のティーム・ティーチングで実施していることにある。これは逆に強みでもあるが、スタッフはそれぞれに教師教育の内容もそれまでの教員としての経験も異なる。どの学年もペアになるスタッフが経験やトレーニングの違いを乗り越えて合議の上でカリキュラムと授業構築を行っていかなければならない。小学校教員は授業担当コマ数も中高に比べて多いことから打ち合わせに使用できる時間も限られている中で効率よく進めねばならないという困難さがある。

3. 指導・支援の方法

筆者はこれまで勤務大学の附属校の支援をはじめ、同法人外においても、学校単位、もしくは自治体単位での英語教育改革を要請され従事した経験がある。(その一例に湯川 2019 がある。) 中高の場合に生徒の英語力が伸びないのは、教師が「言語とは語彙・文法ルールなど英語の構成要素である」とみなし、それを教えることのみが教師の仕事であるといった英語観、英語教育観を持っていることに起因する人が多い。その場合にはまず、英語の構成要素は英語でコミュニケーションをすることのほんの一部を成す知識に過ぎないことや、むしろそのような言語要素の知識は言語を運用し何等かのタスク(=「課題」、達成すべきゴール)を達成することを通して身に付ける場合も多いのだといったことを指摘する。このようにして英語・英語教育観のシフトをうながし、それに沿った授業のあり方のサンプルを、各校の教員の英語力や教材作成能力などに応じて示しつつ、講義をすることから始めることが多い。

教員養成や現職教員の授業力の向上については、大学英語教育学会(JACET)の中の教育問題特別部会が、ヨーロッパで開発された外国語教員が持ち合わせているべき知識や技能のリスト(EPOSTL, European portfolio for Student Teachers of languages)や、それを日本に文脈化したリスト(J-POSTL)を教員自身の振り返りに活用することを通して授業力の向上をめざす手法を広く紹介・公開している。(「JACET 英語教育問題研究会」ウェブページ <http://www.waseda.jp/assoc/jacetedu/> を参照されたい。)

ただ、前項でも示したように、K校の場合には、カリキュラムを構築しつつ授業力の向上を同時に図っていかねばならず、総論は述べるが授業案の評価・改善は各自の省察に待つといった時間のかかる方法はとれなかった。そこで、支援の初年度である本年度については、以下の4つの支援方法をとった。

(なおK校は筆者が訪問するには片道5時間かかる遠方に位置する。)

- ① 初回の授業見学とニーズ把握：5月末に初回の授業見学を行い、授業実践のうちうまくいっている点と問題点を特定した。この初回については筆者の滞在期間が短く、7名の英語科スタッフとは1名を除き全て初対面であったことから、この会にはすぐに講義や助言をするのではなくまずはニーズ把握に集中した。それぞれの教員と短時間懇談し、困っている点、疑問に思っている点を聞くことを通して、それぞれの教員が持つ英語教育観とK校での授業についての自己評価の様子を理解することに努めた。

- ② 指導案点検と助言：5月の訪問以降に、全貌を知るために4月以降の全ての授業の指導案の記録を共有してもらった。それについて指導案に書き込む形でフィードバックと助言を行った。6月半ばまで、7月まで、10月までと3度に区切り指導案を共有してもらい筆者が点検・助言を行った。
- ③ 2回目授業見学+録画ビデオの分析+フィードバックと改善ポイントの協議：9月初旬に2度目の訪問をし、今度は3日間の日程の中で全ての学年の授業をもれなく1授業時間全部を観察するようにした。授業の直後には個別に授業担当者へフィードバックを行った。3日目の午後にスタッフ全体に対して行った事後の振り返りの時間には、授業を録画したビデオを適宜抜粋して再生しながら、前回の参観時に比べて改善されている箇所を共有した。また、授業の中で、児童の発達段階と合致していないため差し替えるべきであると判断した活動について、また、合致しているが1つの活動が長すぎるので短縮し別の活動を挿入した方がよい箇所については、差し替える候補となる活動の選択肢を複数示した。それをもとに低学年担当者と中学年担当者ごとに小グループを作り、どのような活動が最適であるか協議してもらった。
- ④ 評価についての講義+他校のサンプルテストの理解：K校は2期制（1期をさらに2タームに分割）をとっているため9月は初めての通知簿を作る時期にあっていた。K校では2020年より学習指導要領によって規定されている新しい3つの観点別の評価、つまり、「第1観点-知識・技能」「第2観点-思考力・判断力・表現力等」「第3観点-学びに向かう力・人間性等」に沿った評価と通知簿の作成を予定していた。しかし、この3観点にもとづいての評価制度はまだ新しく、英語科の場合にどのようなクイズ、テスト、パフォーマンス、見取りなどをどの観点に属する評価とすればよいのかについての共通理解が持てていなかった。そのような事情を踏まえ、筆者が現行の学習指導要領が示す観点別評価のエッセンスについて講義を行った。またその際に、すでに経験済みの別の私学の小学校（F小学校）のテスト（単元ごとのクイズや学期ごとの定期考査）の内容をサンプルとして紹介しつつ、そのうちのどれが第1観点で、どういった設問が第2観点の資料となり得るかをスタッフとともに検討した。また授業内のパフォーマンス課題も同様に協議をした。第3観点はどのような方法で評価が可能なのかについてもいくつかの可能性を示した。

4. 指導内容とその成果

この項では、実際の指導の中身と、筆者の把握できた授業上の変化についてまとめる。英語科スタッフがこれらの授業力向上についての活動についてどう感じたのかは次の項で述べる。

① 授業見学とニーズ分析

上で述べたように、5月の授業見学はニーズ分析が主な焦点と考えた。英語科の授業に対して児童はどのクラスにおいても教員の指示に従い規律正しい行動をとっていた。一部単語の暗記のためのドリルが長く続くと退屈そうな様子を見せる場面もまれにあったが、それ以外の場面では楽しく学んでいるように見えた。新規の学校で児童と教員の信頼関係が構築されていることは何にもまして重要である。

授業については、小学校英語授業にありがちなことではあるが、K校でも(a)英語の形式（語彙・発音・構文などの仕組み、以後「フォーム」と呼ぶ）を教える時間が多く、他方、フォームではなく英語が表す意味に焦点を置いたインプットやインタラクションが少ないことが特徴的であった。また、

(b)小学生であるとは言え、児童の年齢が高くなるにつれてより発達している認知能力の高さに活動

が合致していないこと（例：次ページ掲載の表1（b）の事例）が多々あった。こうした傾向は全学年に共通して見られた。

そこで、(a)の問題の解決の一助として物語性に富みメッセージ内容が明確な歌や絵本を選び、1授業時間の中で必ず歌と毎日異なる絵本の読み聞かせを入れるよう助言したところ（以前から時々導入していたクラスもあったが）6月以降全クラスで実現された。K校では英語を第1言語とする外国人教員のみならず日本人スタッフも高い英語力を有していたため、歌の内容や児童とやりとりをしつつ理解させる絵本の読み聞かせの技術は非常に高く、この時間は意味に焦点を置いたインタラクションが発生する時間となった。他方、(b)については事例をあげて説明したものの、もともと小学校は生活に身近で基本的な語彙を歌やゲームに載せて覚えることに一定の時間を割く必要があり、適宜に適切な言語要素を選択して児童の生活に根差した意味のあるタスクを考案できるようになるには今後さらに時間をかける必要がある。

② 指導案点検と助言

指導案点検に基づいて、(c) 読みの指導が4学年で系統だっていないこと、(d) 1授業時間の中に盛り込む活動の種類が少ないこと、あるいはある程度種類はあっても、1種類の活動の時間が長くなりすぎて冗長であること、(e) 児童がすでに知っていること（日本語になっている色の名前や1～10までの数など）、あるいは短時間で学習できることに多くの時間を割きすぎて効率が悪い、児童が一人で練習できるので授業内でするには時間をもたない場合（ペンマンシップやワークブックの問題演習）があることを指摘した。9月に訪問した際には(a) (d) (e) についてそれが一定改善されていた。(b) (c) についても改善の萌芽が見られた。(a) (b) (e) の問題とそれが改善された事例のサンプルを表1に例をまとめる。(c) については、中学年において、児童が文章を自力で音読する力があることがすでに分かっているにも関わらず、多くの時間を文字と音の対応や3文字からなる単語の発音に割く学年と、逆に読みへの導入や練習が全く行われていない学年があったが、10月には両方とも文章レベルおよび物語のテキストの読みの練習が始まっていた。

③ 授業見学+録画ビデオの分析+フィードバックと改善ポイントの協議

9月の授業参観の後のフィードバック・セッションでは、5月の参観と比べて改善されている点について録画ビデオを一部抜粋して見せながら確認した。互いに他の学年の授業の様子を見る機会が少ないことから、同僚の実践から学ぶよい機会となった。また、上で示した問題点のうち、改善されつつあるがまだ不備が残っている(b)(c)(d)について、スタッフの小グループ協議を取り入れたワークショップを行った。(b)(c)(d)のそれぞれの課題と協議をした具体的な解決方法を表2に示す。

表1 (a) (b) (e) の問題とそれが改善された事例 (3,4年生) のサンプル

問題点	4-5月の指導例 ((5)=5分を指す) 下線=意味に焦点を置いた活動	9月の指導例 ((5)=5分を指す) 下線=意味に焦点を置いた活動
(a) 英語フォームの練習が多く、意味に焦点を置いた活動が少ない (e) 児童が個人でできることであり授業時間を使用するのはもったいない	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 歌 短い質問(How are you?など)を聞き、児童が挙手した児童のうちの1人が答える(7) ・phonics (8) ・体の部位の名称の復習の後先生の言った色と形 (a pink circle など) でロボットを描く(15) ・ペンmanship (5) ・絵本読み聞かせ (5) ・まとめ (5) 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 歌 瞑想(4) ・ウォームアップ 先生が動物について3 hints をあて、児童が何なのかをあてる(3) ・Phonics との関連で語末音に規則性のある単語を Bingo シートに書かせ、先生が発音した単語を○で囲む(13) ・At a farm in Sumire Town のテキスト内容について児童に質問を投げかけながら、文をリピートさせながら確認(10) ・本時の名詞(動物)と形容詞の練習(5) ・自力で絵本読み+別の絵本読み聞かせ+半数は振り返りシート記入(10)
	<p>解説：(a)5月にはルーティーン化した質問-回答という、意味が多少伴う復習活動があったが、意味に焦点化した新しい活動は絵本の読み聞かせのみだったのに対し、9月には、3つの活動に意味に焦点を置く新規の活動が設定されていた。(e)ペンmanshipや教科書付属のエクササイズは基本的に宿題など授業外扱うようになった。</p>	
(b) 児童の認知能力の高さに対し活動の認知レベルが低い	<ul style="list-style-type: none"> ・Touch color game 先生が言った色に合致する色の物物を見つけ触る。 ・body parts 体のパーツの学習とからめて、目が3つなどパーツがユニークなモンスターを描く(あるいは描写を聞いて描きとる)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・食材の学習と関連づけて、先日給食で食べたスペシャル野菜カレーの中に入っていた野菜の種類と数を考えさせる。その際に必要なのは190食であることをふまえさせる。また、通常のカレーの場合に入っていたニンジンとジャガイモの数をヒントとして与える。回答として学校の栄養士の先生への英語でのインタビュー内容を聞き取る。 ・食材の学習の際に、世界の食べ物(フォー、タコス、ボルシチなど)に必要な材料を考えさせる。
	<p>解説：4-5月に色名と目、鼻、などの体のパーツについての学習があった。そもそも色名は借用語として日本語の一部になっており児童はすでに知っているためそれほど時間をかける必要はない。また体の部分を発展的に学習するタスクとしては、モンスターを描くという活動は愉快ではあるが日常生活には存在しないことから真正性(authenticity)に欠ける。他方9月には実生活での自分たちの給食の食材の数を考えたり、日本にも紹介されている世界の食べ物を扱ったりなど身近な話題でありかつ思考を必要とする活動が出現した。</p>	

表2 (b)(c)(d)の課題と具体的な解決方法についての協議

問題点	協議内容
(b) 児童の認知能力の高さに対し活動の認知レベルが低い	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校英語で扱う動物、フルーツ、野菜、魚、場所、コメ、建物、一日のスケジュール、教科、仕事、スポーツ、一年の行事などについて、テーマに関連する語彙を学ぶだけでなく、地域や児童の生活に根差したトピックへと深化させて教材化するとしたらどのような可能性があるかを小グループで考えてもらった。 ・筆者から事例として挙げたのは、サケの生涯、野菜の季節と食べる部位、フルーツの生産地、海外の学校の教科や一日のスケジュールの様子と社会的背景、将来就きたい職業の国際比較など ・学年ごとに、どのテーマなら可能でどのような活動をすればよいかについてアイデアが活発に議論されていた。
(c) 読みの系統的な指導ができていない	<ul style="list-style-type: none"> ・児童個人による絵本の音読の様子や授業内で黒板に書かれた初出の文章を読める様子から、3,4年生は単語レベルの読みの練習ではなく、文や絵本を丸ごと読む練習を取り入れるべきであることを指摘した。以下の①から⑥の音読練習のうち、どの練習がどの学年にふさわしいかを考えてもらった。④よりも③の方がよいなどと、児童の様子を想像した意見が交わされていた。 ①先生のあとでリピート、②ガイド付き音読(生徒が全体で読むのを先生が援助) ③ペアで1頁ごとに交替で読む、④ペアで同時に読む、⑤児童がモニター上の文字を指し示すのに合わせて全体で読む、⑥下の学年の児童に読み聞かせ
(d) 1つの活動が長すぎる	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年のフルーツがテーマの単元で、最終タスクとして自分の好きなフルーツパフェを作ろうというタスクがあるが、それ以前のフルーツ名を十分に言えるようになるための練習が長くて単調になるという問題点があった。 ・そこで、多くの名詞に応用が利く「リスト化 listing=児童に思いつく限りの当該のテーマの名詞(ここではフルーツ)をあげさせる」「分類 categorizing=児童に何等かの基準(季節、色、値段、食べる頻度、栄養価など)でそれらを分類させる」「ランクづけ ranking=児童に何等かの尺度で順位付けさせる」「比較 comparing=2つを選んで比較させる」の手法を紹介し、どの学年のどのテーマなら、どのタスクで楽しく活動できて定着のためのよい練習になるかをグループで協議してもらった。

④ 評価についての講義+他校のサンプルテストの理解

評価は目の前の越えなければいけないハードルであると同時に指導の裏返しでもあるので、授業改善にとって重要な内容であった。すでに第2節で述べたようにスタッフは観点別評価に不慣れだったため、講義で知りたかったことがよくわかったという感想があちこちから聞かれた。

F 小学校のベテラン教員を筆者に加えて講師として招き、単元ごとのクイズや高学年で実施しているという学期末のテストを紹介してもらった。45分のテストで500語近いテキスト（リスニング問題と読解問題の合計）を見ることは、1校の事例に過ぎないものの、K校の2年後をイメージするのにも役立った。

5. 英語科スタッフの受け止め

本稿の準備については、データの研究使用の許可についてK校の学校長および英語科スタッフに説明して了承してもらった。その上で、上で述べた指導方法に対応する4項目および「その他」を含む記述式アンケートを実施し、9月までの支援についての受け止め方について聞いた。その結果は次の通りである。まず、指導案チェックは「歯に衣着せぬ直接的なコメントが辛いと感じたこともあったが必要なことだった、すでに前節で述べたように評価の講義やサンプルテストは「タイムリーで有益な情報」だった、「雲が晴れたような気がした」とのことであった。授業後のフィードバックとワークショップも「多くのアイデアが得られた」と好評であった。「その他」の記述欄には授業進度や教材などに関する筆者への質問やコメントもあり、スタッフが支援者としての筆者に対し相談をしたいと思う相手であるという信頼感が生まれてきているのを感じることができた。

6. 結論

K校の授業改善・構築の作業はまだ始まったばかりである。初年度の4月から10月までの実践にとどまるが、その方法とすでに見え始めている改善の様子について報告した。私学の英語教育の構築や教師教育に関する情報は少ないため、K校の事例が、情報を求めている他の私立小学校に何等かの参考になれば幸いである。

引用文献

湯川笑子（2019）「私立H高校の英語教育改革実践—訳読法から英語でコミュニケーションな授業への転換、中間報告—」『地域連携教育研究』4, 88-94.

湯川笑子・バトラー後藤裕子（2021）「CLIL再考」『立命館教職教育研究』8, 1-10.

A Case of English Education Reform in a New Private Elementary School

Emiko YUKAWA

This is an interim report on English education reform in a newly-established private elementary school. Private elementary schools provide considerably more instructional time than public schools; thus, improvements to English education must cover not only teaching methods but also the school's own curriculum and materials. I approached this reform project in four steps: (1) initial class observation and need analysis; (2) checking teaching plans for all grades and providing feedback; (3) second class observation, reflection, and discussion for improvement of problematic activities found; and (4) lecturing on assessment and presenting example term tests. I identified six significant problems and pointed them out to the teachers: (a)lack of time spent on meaning-focused (as opposed to form-focused) activities;(b)mismatch between pupils' high cognitive abilities and cognitively unchallenging learning content; (c)lack of systematic instruction on how to read English across grades; (d)lack of variety in activity types in one lesson; (e)time wasted on activities for already-learned knowledge and/or activities inappropriate for spending class time (e.g., penmanship). Although this report only covers April through October, some improvement has already been seen in (a), (d), and (e). There are some subtle signs of improvement in (b) and (c). We will see how improvement will continue to be realized in the future.